

中村 昌直さん (80歳) 夜須町手結山

昭和54年から震洋隊「奉賛会」の会長を務め、犠牲者の慰霊に献身されています。毎年8月16日は、慰霊塔のもとで震洋隊慰霊祭が行われます。

中村昌直さんの終戦は、十九歳の時でした。海兵隊として赴任していた九州・相浦で終戦放送を聴いたそうです。
終戦翌日の悪夢
九月になり、やっとの思いで帰って来た故郷の海岸は、樹齢三百〜四百年といわれていた立派な松の木が焼けこげ、景色が一変していました。終戦の翌日に、震洋隊の爆発事故が起きたというのでした。
その日、夏の暑い陽が落ちてやっとな涼しい風が立ち始めたころ、昌直さんのお母さんは自宅の涼み台にいたそうです。

手結山の南の方から「さーのっ！さーのっ！」と、大きな掛け声が聞こえていたそうです。すると突然その声の方向から巨大な火柱が上がり、ものすごい爆発音がしたかと思つと大きな松の木よりも高く、まるで、嵐のように舞い上がるたくさんの方の身体やドラム缶が見えたということです。
翌日、昌直さんのお父さんたち部落の人も、現場に借り出され、砂浜や海の中を遺体の収集にあたりましたが、地獄絵図さながらの光景に目を覆ったと言ったことでした。
なぜ？という思い
終戦の報せに「もうすぐ、帰れる」と、まことに台しかな電話で、妻や家族に連絡していた隊員たちのこと。
いろいろな話を聞くにつれ、突然の敗戦に混乱していた時とはいつても「なぜ？」という思いが強くなつていったということでした。

昭和五十四年から奉賛会の会長を務め、慰霊祭が五十回を数えた時「慰霊祭は今回を節目に最後になるのか」とい



鯨の中
夜須町の有志で結成された「奉賛会」により、建てられた慰霊塔。そのわきに「鯨の中の畳の部屋に灯が点る」と刻まれた石碑があります。
昌直さんは、戦争の暗く大きな時代にのみこまれた犠牲者の魂に、慰霊塔が建てられ、灯りの点る居場所ができた」という意味に受け止めたそうです。

いろいろな方から聞かれたそうです。
昌直さんは、自分の気持ち、五十周年の風呂敷に「ますらふの」と詠んで配りました。遺族はすべて県外の方で、九州から北海道と広域にわたり、年とともに参列する人は少なくなっています。それでも、長い間かわつてきた遺族の方や生き残った方の深く強い思いに、慰霊祭を絶やしたくないと思つたそうです。
昌直さんも今年で八十歳。会長職の代替わりをとの思いもあります。
この土地で終戦の声を聞きながら、犠牲となつた百十一年。あの六十一年前の尊い命の意味を考え、平和につなげることを、今を生きる私たちの務めだと話してくれました。



ますらふの散りて流るる五十年とわに祀らむ 碑の朽ちるとも

住吉震洋隊奉賛会



八月十五日は終戦記念日。太平洋戦争が終わって今年で六十一年が経ちます。多くの犠牲を生んだ太平洋戦争。男性は紙切れ一枚で戦地へ送られ、女性や子どもは「銃後の守り」につきました。そして、尊い命が少なくとも世界で三千万人以上も奪われました。
昭和二十年八月十五日の正午。
「...耐え難きを耐え、忍び難きを忍び...」とラジオから、聞こえてきた天皇陛下の御声で戦争は終結しました。
イラク問題や世界各地で起こっているテロや紛争、北朝鮮のミサイル発射問題。不安な影を感じながらも、私たちの国は半世紀以上「平和」な日々が続いています。

六十一回目の夏

終戦記念日を迎えて

夜須町、住吉の海に向かい若い兵士の銅像と共に「震洋隊殉国慰霊塔」が建っています。碑に刻まれた百十一名の若者の名と、像には「青春」の二文字。この住吉海岸で「出撃命令」により準備中、水上特攻艇に仕掛けられた爆弾の誘爆で、百十一名の若い命が犠牲となりました。
昭和二十年八月十六日、「終戦の翌日」のことでした。
家族や大事な人を失った悲しみ、空襲の恐ろしさ、飢えの苦しみ、戦争がもたらした数知れない辛く苦しい日々を生きた人たちは少なくなりました。
「私たちの国であった戦争」の記憶は、時の流れに埋もれそうになりながらも、戦争を知らない私たちに貴重なメッセージを送り続けています。

震洋隊

太平洋戦争の末期の本土決戦にそなえた特別特攻隊。爆薬を積んだ5〜6mの1〜2人乗り小型ボート「震洋」で、敵の艦船へ体当たり攻撃。住吉の隊は、須崎市に本部をおく160名からなる派遣部隊。「震洋」は、海を震わすほどの力との意味を含め名付けられた。



終戦翌日の昭和二十年八月十六日午後六時ごろ、震洋隊須崎本部から「敵の機動部隊が、本土上陸の目的をもって土佐沖を航行中。直ちに攻撃せよ」との無電命令が入った。
住吉の隊は、全員総がかりで準備を開始。「震洋艇」を海岸に並べエンジンの調整にかかったところ、突然そのうちの一隻が発火し、二十二隻が次々と誘爆した。巨大な火柱に地を揺るがす爆音とともに百十一名が爆死。多数の負傷者を出す大惨事となった。
翌十七日朝、誤報であることが判明。混乱の時であったため、この悲惨な事故は世間に大きくとりあげられることなく忘れられていった。

昭和三十一年八月十六日、その霊を末永く弔うため夜須町の有志が奉賛会を結成し慰霊塔を建立。その後、昭和五十六年八月十六日に元搭乗員の有志により銅像が建てられた。
太平洋に向かって建つそれは、青春をこの地に捧げた若者たちの鎮魂と、くり返してはならない悲劇を後世に伝えている。